

「ライバルの分も」エース奮投

青春譜

「お前なら打ち取れる。大丈夫だ」。試合中、一塁から終始、励まされ続けた。背番号3の佐藤隼翔は、ずっとエースの座を争ったライバルでもあり、頼もしい仲間。明秀日立に8点を奪われる苦しいマウンドでも、その存在は心強かった。

昨夏は、背番号1を隼翔に譲り、自分は10番だった。その悔しさを糧に、フォーム改造や苦手だったランニングに率先して取り組んできた。互いを意識し、高め合える欠かせない存在だ。しかし6月、隼翔は試合中の走塁で送球が左足くるぶしに当たり、投げ込みがでさなくなった。

1才82の体格から角度ある直球を投げるライバルは一塁手に。10秒ほど小柄ながら、球速130km/h後半の直球と切れ味良いスライダーを持つ自分がエースを任せられ

佐藤 大斗 投手(科学技術3年)

た。「あいつの分まで」。チームの命運と隼翔の思いと一緒に背負った夏だった。

五回まで無失点と踏ん張ったものの、相手打線が3巡目となる六回からつかまった。1人で投げきったとはいえず、終盤は失点を重ねて大敗。「ごめん」。試合後のベンチで、隼翔に謝ると温かな言葉が返ってきた。「エースらしい頼もしい投球だった。謝る必要ないよ」。そう背中をたたかれて、こらえていた涙が止まらなくなった。

(田原遼)



明秀日立 000 000 212 | 8
 科学技術 000 000 000 | 8
 (明) 菅谷一高橋
 (科) 佐藤大一金子
 ▽本塁打 高橋(明) ▽二塁打 南村、金山(明) 井坂(科)